明治・大正・昭和の細菌学者達 番外編

野口英世記念館を訪ねて

東條尚子（とうじょう なおこ）
Naoko TOJO

はじめに

2015 年 4 月 28 日、公益財団法人野口英世記念会が運営する野口英世記念館を訪れた。4 月 1 日にリニューアルオープンしたばかりの記念館である。竹田美文先生が野口英世記念会の副理事長をなさっており、今回の取材を快く引き受けて下さった。竹田美文先生はモダンメディア 700 号記念特集の座談会「微生物学のパイオニア達の哲学を訪ねて」に語り手としてご参加いただいた（2014 年 3 月号）。最近では、「明治・大正・昭和の細菌学者達」のシリーズをご執筆いただいており 2015 年 2 月号、4 月号で野口英世を取り上げていただいている。

野口英世記念館は福島県耶麻郡猪苗代町にある。郡山から磐越西線に乗り猪苗代駅までの約 40 分間の車窓には、山頂に雪が残る磐梯山が悠然と聳え立っており、晴天の青空によく映えていた。東京の桜は 4 月の初めに散ってしまったが、猪苗代の海抜は 500m 以上あるため郡山から猪苗代に近づくにつれ、車窓に見える桜は一段一段春をさかのぼるように満開になっていった。猪苗代駅の改札をくぐると、竹田美文先生、学芸課主任の森田鉄平さん、総務課主任の野口由紀子さんがわれわれを出迎えてくれた。国道 49 号線（越後街道）沿いにある野口英世記念館までは猪苗代駅から車で 5 ～ 6 分である。沿道は、見渡す限りまだ田植え前の乾いた田園風景が広がっていた。猪苗代湖には冬になると白鳥や鴨などの渡り鳥が多くやってくるそうだ。早春の雪融けの頃は田んぼの落ち穂を食べる白鳥の姿が日常の光景だと竹田先生に教えていただいた。訪問した日は 4 月下旬としては気温が高かったが、街中の日陰にはまだ雪が残っていた。猪苗代の冬が雪深い土地柄であることは容易に想像できる。夏でもクーラーはほとんど使わないそうだ。記念館に到着すると、さっそく館内を詳しく案内してもらった。

Ⅰ. 野口英世記念館の歴史

野口英世博士が西アフリカの黄金海岸（現ガーナ共和国）で殉職したのは 1928 年（昭和 3 年）5 月 21 日、51 歳の若さであった。東京でも追悼会が行われ、その折に出席した人々により現在の公益財団法人野口英世記念会の前身「野口英世博士記念会」を設立する話がまとまり、記念会の最初の事業として翌年に生家の保存と 2 つの記念碑が建立された。1938 年（昭和 13 年）には文部大臣より財団法人の設立が許可され、その翌年 1939 年（昭和 14 年）の博士の命日に「野口英世記念館」が開館した。

2013 年（平成 25 年）からは公益財団法人となり、東京にあった記念会本部を記念館がある猪苗代に移し、1 年半の増改築期間を経て今回リニューアルオープンとなった。

Ⅱ. 新しい野口英世記念館の概要

記念館は野口英世博士の生家のある場所に建てられている。生家は茅葺で当時のまま保存されており（**写真 1**）、北に磐梯山、南に猪苗代湖を望む。一歳半の時に落ちてやけどを負った囲炉裏や（**写真 2**）、19 歳で医術開業試験受験のため上京する折、床柱に刻んだ決意文「志を得ざれば再び此地を踏まず」も当時のまま残されている（**写真 3-1, 2**）。実際に生家の中に入ることもできる。生家南側の広場には 1929 年（昭和 4 年）に建立された誕生地碑と忍耐の碑がある（**写真 4**）。この碑の原石は、地元の猪苗代町（旧翁島村）民らの手により磐梯山麓より運ばれ、建立された。忍耐の碑には博士直筆の書が刻まれている。

写真 1

写真 2

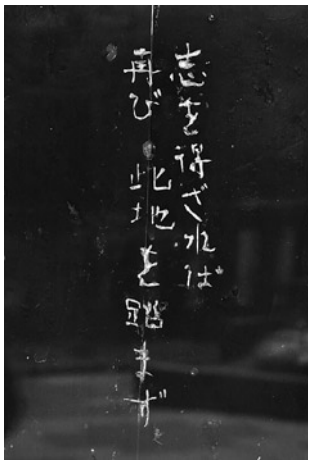

写真 3-1

写真 3-2

写真 4

アメリカでの生活が長く筆で漢字を記す機会も少なかったと思われるがなかなかの達筆である。

リニューアルされた記念館は生家の隣に建てられている。記念館西側は全面ガラス張りとなっており、そのエントランスホールからも生家の全貌を見ることができる（**写真 5**）。展示室 2 階に上がる階段からは磐梯山が望めた（**写真 6**）。2 階に上がるとまず、「プロローグシアター」がある（**写真 7**）。15 年ぶりにアメリカから故郷に帰った英世自身の回想により代表的なエピソードが紹介されている。家族、恩師、友人への感謝の気持ち、科学者としての責任、科学や医学の素晴らしさなども紹介する「野口英世一度だけの里帰り」と題した約 6 分半の映像である。出演している野口英世役、夫人メリー役の役者は竹田先生らがオーディションをして決めたと伺った。イメージぴったりでまるで野口英世本人の映像を見ているようだった。

次に、「英世の生涯」を展示したブースがある。野口英世の偉業が紹介され、人類のためにささげた野口英世の生涯をたどる。猪苗代・会津若松時代、東京時代、アメリカ・デンマーク時代、中南米・アフリカ時代と生涯を時代ごとに分け、多くの遺品や資料、写真を展示している（**写真 8-1, 2**）。また、各時代を象徴する英世にかかわりのある言葉も紹介している。

次いで、「母シカの手紙」コーナーである。アメリカにいる英世にあてた母シカの手紙が展示してある（**写真 9-1**）。猪苗代の風景とともに会津言葉での

写真 5

写真 6

写真 7

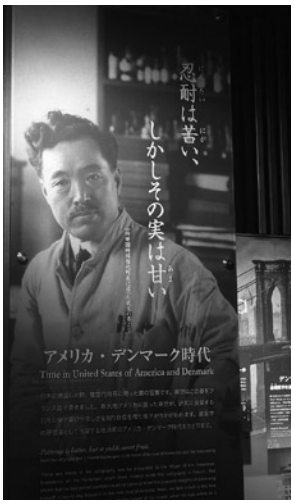

写真 8-1

写真 8-2

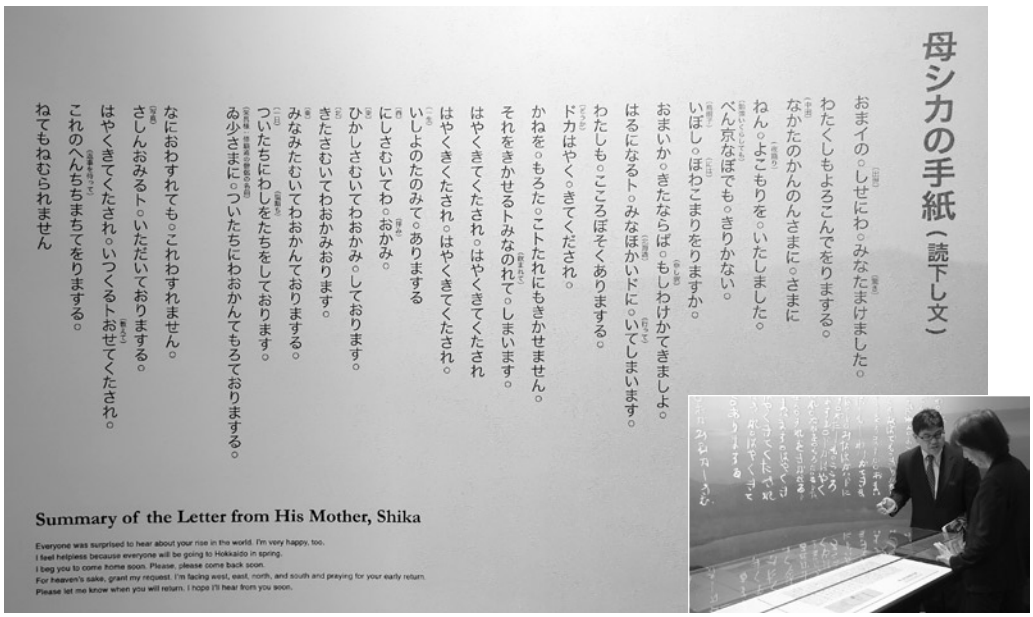

写真 9-2　　写真 9-1

手紙の朗読を聴くことができる。文字を書くことは得意ではなかったそうだが、「はやくきてくたされ」とくりかえす行は、息子に一目会いたいという母の想いが強く伝わりとても切ない（**写真 9-2**）。一方、野口英世の生涯の中で父佐代助の話はあまり出てこない。野口家に婿入りし、郵便配達の仕事に携わっていて、母シカより長生きであった。英世の頭の良さや器用なところは父親ゆずりとも言われている。自分が有名な野口英世の父であることは話したがらなかったという逸話があり、控え目なひとであったと森田さんからお聞きした。

次は、「素顔の英世」のコーナーである。研究に没頭していたというイメージが強い英世だが、時間があると別荘で休暇を満喫していたとのこと。シャンデーケンの別荘の雰囲気で英世自作の書画や趣味の道具が展示されている（**写真 10-1, 2**）。私には研究者は文字が下手という勝手な思い込みがあったが、英世は日本語も英語も達筆であったことは少々意外であった。

「野口英世の略年表と世界に残る英世の足跡」のエリアでは、年表とともに、受領した勲章やメダルが展示されている（**写真 11**）。特に注目される業績は、「梅毒スピロヘータの研究」、「オロヤ熱の研究」、「黄熱病の研究」であり、日本を含む 15 カ国から学位や勲章が贈られた。世界中から賞讃を受けたことを伝えている。

写真 10-1

写真 10-2

ここを抜けると、「研究室と野口博士ロボット」コーナーがある。ロックフェラー医学研究所の野口博士の研究室を再現したコーナーであり、博士ロボットが身振り手振りを交えながらメッセージを届けている。「がんばれば夢はかなう」などと励ましてくれる。とてもリアルなロボットに驚いた（**写真 12**）。偉人の記念館でこういった試みはあまり見たことがない。没後 80 年以上たつが、まるで今生きているような博士を身近に感じることのできる斬新な企画である。

次は、「体験！バクテリウム」コーナーである。野口英世が挑んだ細菌の世界を映像やゲームをとおして体験できる。細菌の基礎知識や感染症研究のあゆみが紹介されている。細菌の培養や実験ゲームを体を動かしながら体験できる楽しいコーナーである。クイズ形式の質問に全問正解すると「細菌マスター」の称号がもらえる。子供から大人まで楽しめるコーナーである（**写真 13-1 ～ 4**）。

Ⅲ. 出前授業

平成 25 年度より、新しい試みとして、修学旅行等で野口英世記念館の見学を予定している小中学校や修学旅行の宿泊先へ、竹田美文先生を中心とする記念会の職員の方が出向して野口英世の生涯と業績についてわかりやすくお話をする出前授業を始めていると伺った。事前に説明を聞いておけば見どころがよく理解できるし、興味を持ったところを下調べしておくこともできる。無料で出前授業が受けられるのであるから学校側にはずいぶんお得な企画だと思う。記念館がリニューアルされたこともあり、きっとひっぱりだこになるに違いない。

写真 11

写真 12

写真 13-1

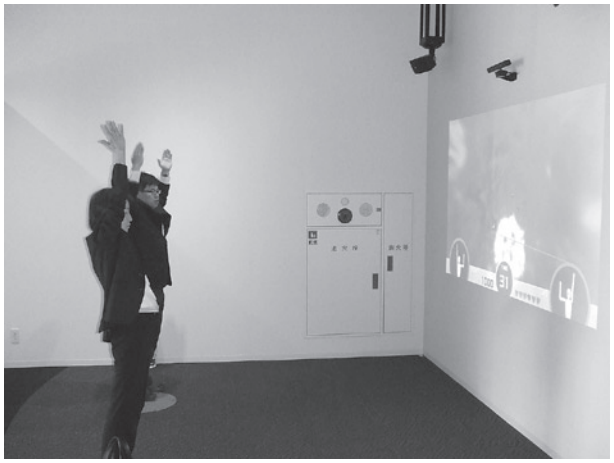

写真 13-2

写真 13-3

写真 13-4

おわりに

野口英世は誰もが知る偉人である。偉人の記念館なので、当時の写真や縁の品が並んでいることを想像していた。リニューアルされた記念館は、それだけではなく、映像やロボットを使った説明、実験ゲームなど子供にも科学や細菌に興味を持ってもらう工夫が随所になされていた。偉人の紹介にとどまらず、未来ある若者が野口英世のように科学に興味を持ち、夢をかなえるためにあきらめないで努力を続けることの大切さを学べる場でもある。

4年前の震災以降、修学旅行生が減り、野口英世記念館への来訪者も以前に比べると少なくなっているとのこと。記念会の方々の熱意と工夫により、展示内容が見直され、より魅力的な記念館となってリニューアルオープンしたので、是非、多くの人に訪問してもらいたい。きっと元気が出るに違いない。

謝　辞

私たちの訪問に際し、詳細な説明をしてくださった森田さん、スケジュールを管理してくださった野口さんはじめとする記念会の方々に感謝を申し上げます。そして最後に、エントランスにある野口英世の銅像の前での竹田美文副理事長と私のツーショット（**写真 14**）を感謝の気持ちを込めて掲載させていただきます。

探訪子：公益社団法人東京都教職員互助会　三楽病院
臨床検査科　部長　東條尚子

写真 14